

「有（有形の現象）」から永遠の「無（本質）」へ
— 『易経』、DNA、そして Thomas Schönauer の作品に共通するもの —

ウルズラ・リュットン

この世界にはさまざまな文化が存在します。こういった異なる文化のありように目を向け、さらに、目に見える現象の背後にまで意識を向けると、多様な文化の根底にはひとつの共通した宇宙観——全宇宙を統べる秩序についての哲学——があることに気づかされます。聖書、ゲルマン神話のエッダ、日本の古事記、そして、アメリカインディアンの伝承には、天地創造の物語として語られている宇宙観・世界観があり、そのどれもが恐ろしいほどまでに酷似しています。そこでは、「地球、つまりこの世はどのようにしてできたのか」、「その基礎にはどのような法則があるのか」、「なぜ私たちはここにいるのか、そして、私たちがなすべきことは何か」といった共通の問いが投げかけられているのです。

古代中国に『易経』という書物があります。これは現存する最も古い書物のひとつであり、絶えず変化する宇宙の森羅万象を支配する一定不易の法則（道）を説いています。この書物の中で語られているのは、神々の物語や英雄伝説ではなく、「陰」と「陽」という2つの対極をなす根源力（太極）が無限に変化するさまであり、そして、この陰陽を説明原理として天地の法則が明らかにされます。その体系性には驚くべきものがあります。

『易経』では、宇宙の原初状態は「一」（陽）と「--」（陰）の線を3つ組み合わせた8種類の記号、すなわち、八卦（乾☰、兌☱、離☲、震☳、巽☴、坎☵、艮☶、坤☷）で表わされます。この八卦は韓国の国旗（太極旗）に見られるように国家の象徴として使われることもあります。この旗の中央にあるのは太極円（太極文様）で、陰と陽がひとつになった万物の根源——天地未分の太極の中に陰陽が生じている様子——を描いています。その太極円を取り囲むように八卦を代表する4つの記号（四卦、四象）が配置されています。☰（乾）は創造性、すなわち「天」を、☷（坤）はすべてを受け入れる大地を、☲（離）は「火（日）」を、☵（坎）は「水（月）」を表わします（残りの4つの記号☳（震）、☴（巽）、☶（艮）、☱（兌）は、それぞれ「雷」、「風」、「山」、「沢」を表わします）。そして、太極円を中心にして、「天」と「地」、「火」と「水」がそれぞれ向き合っています。

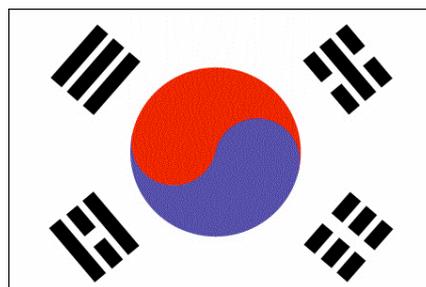


図1：太極旗（大韓民国の国旗）

『易経』では、独特の配列法にしたがって八卦を2つずつ組み合わせることで六十四個の記号（卦）を作ります。この世の一切のものは、陰、あるいは陽となって無限に変化しますが、その変化の中に永遠に変わることのない法則（道）があり、それゆえ、宇宙の森羅万象は陰--と陽—から作られた六十四卦の中に表現されるのです。ひとつひとつの卦には、天の方位、季節、植物、色、音などの固有の属性が与えられ、六十四卦全体の中での位置が定められています。

さて、人類による科学上の偉業のひとつに、遺伝子情報を解読する鍵となるDNAの発見があります。これは現代における最新の科学研究がもたらした新たな宇宙創造の物語と見なすことができるでしょう。1953年の発見から時を経ずして、ひとりのドイツ人医師がDNAと『易経』との類似点を指摘しました。古代中国の『易経』に見る世界像と現代科学の粋とも言うべきDNAモデルがその根本において似ているという主張です。『易経』とDNAモデルでは、すべての生命の生成消滅過程が3つの文字を組み合わせた64個の記号で再現されます。自然をあるがままに観察した『易経』では陰と陽の二極が使われていますが、鎖状の分子が互いに絡み合う構造——二重らせん構造——をしているDNAモデルではプラスとマイナスの二極がベースになっています。

宇宙の森羅万象を構成する『易経』の六十四卦のように、DNAコードも生命の構成を設計します。『易経』とDNAモデルは、無限に変化していく生成・発展・消滅の過程の中で、ひとつの変わることのない法則が存在することを示した点で共通しているのです。下の図は、らせん構造を持つDNAモデルの一番上の4つのはしごの部分と『易経』の文様（世界鍵）を組み合わせたものです。

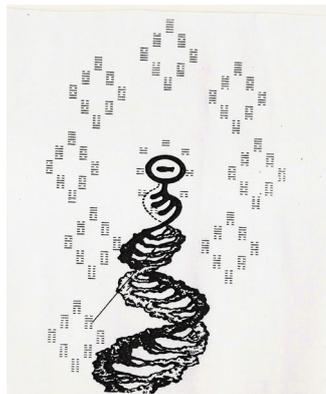


図2：『易経』の文様（世界鍵）と二重らせん

『易経』の規則性から考えますと、陰と陽の2つの対極に最大限の平衡感覚を持たせることが古代中国人の理想でした。そこにはオカルト的な要素はなく、あくまでも現実的な視点が重視され、その理想は医術から建築術、そして、政治から哲学にいたる、すべての学術的・社会的分野に見出せます。こういった「釣り合い」をテーマにした極めて精巧な作品が中国の伝統文化には存在します。

ところで、キリスト教的西欧世界に生きる人々にとってなじみ深いのは「釣り合い」よりもむしろ「調和」という視点でしょう。西洋世界での美的感覚の基礎は、何と云っても「調和」です。「調和」こそが、音楽、建築、絵画における美の本質なのです。「調和」は芸術家が努力して目指す先であり、それは、対象の根本に潜む本質的な構造に注意を払わないことや、そこに起因する対象との衝突から生じる「不調和」とは対極をなすものです。

調和、そして、自然界の秩序に注意を向けること。これが、ドイツの芸術家 **Thomas Schönauer** の作品を本質的に特徴づける要素です。とりわけ、材料の吟味、個々の材料の特性を徹底的に研究することが彼の作風の基礎をなします。

Schönauer が好む素材は鋼^{スチール}です。鋼は、鉄を鍛えより堅固にしたもので、その強さからくる安定感、長持ちする堅牢さ、抵抗力の強さなどが特徴です。こういった鋼の特性を内面に秘めながらも、それを超越していくことで、彼の作品は鋼のもつ特徴を超えています。つまり、**Schönauer** は、鋼を使って柔軟な作品を生み出すことで、鋼の重厚さに思いもかけない軽さを与えているのです。さらに、彼は鋼が自然に持つゆるやかな曲がり具合を、その素材の強さとしなやかさの両方を上手に保つことで鋼の魅力を最大限に出しています。彼の彫刻品の多くは容易に理解できませんが、何とも言えない感じが漂っています。そして、ひとつひとつの要素がどうやってまとまっているのか、うまく表現することもできません。しかし、彼の作品は、まさしく有機的にまとまっており、ひとつの統一された原理の下に構想されているかのように思われるのです。

Schönauer の作品を特徴づける「調和」は、彼の色づかいによって一層引き立てられます。たしかに、彼の作品を一瞥しただけでは、どのように理解していいのかとても難しく感じるでしょう。しかし、じっくりと観察すれば、基層にある金属が色を引き立てる役割をしていることに気づきます。金属に着色することで、**Schönauer** は自らの芸術性を高め、ここでまた素材の可能性を誘い出しているのです。それにしても、彼の色づかいは、力強さだけでなく、透明感すら感じさせます。色を塗ることで鋼の輝きを覆い隠すのではなく、むしろ強めていくようにも見えるのです。

これと同じことが **Schönauer** のスケッチにも言えます。ここでも、鋼の下地の上にさまざまな色が塗り重ねられ、ボリューム感のある色の層を出しています。彼のスケッチは彫刻の構想や下書きのためではなく、彫刻の全体的な効果をさまざまなレベルから描き出す、つまり、その作品をまず全体から眺めてみるところに意味があるのです。ですから、彼のスケッチはそれ自身が独立した作品であり、二次元と三次元の間にある中間的な場、つまり、実験的に二次元と三次元の間境界空間を作り出しているのです。

目に見えない法則（道）に注意深く目を向け、それを認知することで、『易経』やDNAに見出されるように、私たちは調和と均整の世界へと導かれます。それは、美しい旋律と均整のとれた姿として表れます。こういった点こそが、まさに **Schönauer** の作品を特徴づける点なのです。彼の彫刻は調和のとれたひとつのまとまりを作り出すだけではありません。それが置かれた場所で、あたかも大きく成長していくかのようにしっかりと根をおろすのです。その構想から完成までのプロセスは、音楽を作る過程を彷彿とさせるものがあ

ります。つまり、素材、色、形がひとつの調和したまとまりへと結びつけられていくさまは、まさしく交響曲のようです。音楽と同じように、Schönauer は作品のひとつひとつの要素をリズムカルに整え、それぞれの部分と色がやさしく変わり行くさまを表現しているのです。彼の作品は調和を描き出しています。それは、全体を見ようとする彼の哲学、素材を秩序よく配置する原理、そして、対象の調和、もしくは統合をもたらす世界を支配する法則へと向かっているからです。Schönauer の作品は、ピュタゴラスの説いた天空の音楽を表しているかのようです。

Schönauer の作品を観ると、変わりゆく運命にある目の前のはかない現象からその背後にある永遠不易のもの感じ取ることができます。この森羅万象を超えたところにあるものは何でしょうか。『易経』の教えに基づけば、私たちの心の目は変化の理を窮めたもの、つまり、変わりゆく（変易の）森羅万象ではなく、その背後にあつてなお変化しない（不易の）法則に向けられます。天地の間にある万古に已むことのない変化をつかさどるこの法則こそ、東洋思想の「道」が意味するところのものでありましょう。

原作：Ursula Lytton（アート・プロデューサー、美術史家）

訳：江藤裕之